

「文楽」で 大阪を 再起動する

その都市ならではの価値を掘り起こし、再起動へつなげる連続特集企画「ルネッセ」。今号では、六代目竹本織太夫氏に、江戸時代の大阪で花開き今もなお進化し続けている「文楽」の本質を余すところなく抽出していただき、そこから見えてくるこれからの大阪の再起動の方法論について語り合う。

増田智泰撮影

対談

「文楽太夫」

竹本織太夫

Takemoto Oriyuu

池永寛明

Ikenaga Hiroaki

「大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長」

所蔵者の要望によりWebサイトへの掲載を控えさせていただきます。

平成30(2018)年12月文楽公演『鎌倉三代記』より
写真提供/国立劇場 協力/国立劇場、人形浄瑠璃文楽座

神棚のおはぎを ちやぶ台に降ろす

池永 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所は、「ルネッセ(Renesse)」をテーマに掲げ、活動を展開しています。「ルネッセ」とは、「再び・循環(Ren)」と「実在する(esse)」を組み合わせた造語です。都市や地域に埋没する本質を掘り起こし、新たなことと融合して方法論(モード)を再構築し、再起動させようという試みです。これまで情報誌『CEL』で5回にわたってさまざまな観点から発信してきましたが、今回は今一度大阪に立ち返り、大阪の象徴ともいべき文楽をテーマに、まちの再起動のあり方と方法論を考えていきたいと思えます。

織太夫 文楽は330年以上かけて、ある意味芸術というものになり、今ではユネスコの無形文化遺産になるまでに成長しました。先人たちには感謝していますし、先人たちが携わり大事にしてきたものに對し、私が承継し後世に伝えていくという自覚ももちろんあります。ですが、今のままで十分であるとは思っていません。

池永 テレビも映画もスマホもない江戸時代、人形浄瑠璃は大坂商人たちに熱狂的に支持されました。人形浄瑠璃は商人にとって多面的に情報

をつかむ場であり、学びの場であり、当時は決して高尚なものではなかったのですよね。

織太夫 今から335年前、貞享元(1684)年に、初代竹本義太夫が道頓堀に竹本座を興し、活況を呈しました。従来の人形浄瑠璃は、歴史上の人物を主人公とした「時代物」の作品ばかりだったのですが、初代義太夫は当時の市井の人物、江戸時代の現代人を主人公とした「世話物」というものをつくったのです。今のワイドショーネタですよ。

その最初の作品が、『曾根崎心中』です。時代物の歴史上の人物でなく、お初という19歳の若い女の子が主人公。そのおかげで「19歳の女の子が主役なんやて。この間、曾根崎であつた心中事件の話をやるみたいよ」と、噂を聞きつけた若い女の子たちがこぞって観にくるようになって、実は料金設定も工夫しています。当時手に職をもっている女の子といったら髪結いぐらいでしたが、彼女たちが1日働いてももらえる金額にしていたそうです。

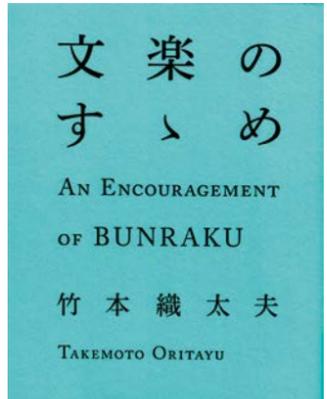
池永 まさに人形浄瑠璃を再定義し、枠組みを変えることによって、新たな価値を創造し、客層を劇的に変えたということですね。

織太夫 そうです。私は文楽を、神棚や仏壇に供えられているおはぎに見立てているんですが、神棚から





平成30(2018)年12月文楽公演『鎌倉三代記』
「高綱物語の段」を演じる竹本織太夫氏。
写真提供/国立劇場 協力/国立劇場、人形浄瑠璃文楽座



織太夫氏が監修する『文楽のすゝめ』
(実業之日本社、2018年)は、文楽の
紹介だけでなく、近松門左衛門ゆかり
のパワースポットや織太夫氏が愛する名
店の案内など、大阪のガイドブックのよ
うにも楽しめる。

ちゃぶ台に降ろすことが大事だと思っ
ています。神棚や仏壇に置いてあるおは
ぎには手を出せない。でも家に帰って
ちゃぶ台に置かれていたから勝手に食
べられます。先の竹本座がやったよ
うに、この神棚からちゃぶ台に降ろす
作業は今も必要です。

池永 文楽は高尚な芸・教養というイメージ
をもたれがちなので、それは面白い考
え方ですね。
織太夫 重要無形文化財保持者(人間国
宝)やユネスコの無形文化遺産とい
った立派なところばかり目立ってしま
うと手を出しづらい。私が監修をした
『文楽のすゝめ』でも、文楽を堅苦しく
語るより、大阪には美味しいものや大
阪城やいろいろな楽も選択肢に入れて
ほしいという気持ちで、パツと手に取
りやすい工夫をしています。我ながら大
阪愛にあふれた本です(笑)。

て興行したのが阿弥陀池、和光寺門前
の芝居でした。当時は阿弥陀池に限
が最先端のまちだったので、ニュー
ヨークだったらブルックリンみたいな
感じでしょうか(笑)。
池永 そうかもしません(笑)。道頓堀
で芝居も観るんですけど、順位は阿
弥陀池の方が上です。江戸時代の
大坂は、日本一の観光都市でした。と
えば「天下の台所」の天満の青物市場
や雑喉場の魚市場を見に行っただ
けは、北前船が出入りす

る湊、大丸などの呉服店、鴻池とか
三井とかの大店といった大坂のダイ
ナミズムを見て回ったので、でもや
っぱり人気は人形浄瑠璃と日本一美
味しいといわれた大坂料理でした。2
泊3日で大坂に滞在し、楽しみ、多
くのことを学んだと思えます。京都
や奈良観光との違いの本質は、まさ
にこの芝居や大坂料理という体験
です。それは、USJやキタ・ミナミ
を周遊する現代の観光と同じ文脈
です。

新旧混じりあう大阪は今も昔も人気の地

池永 大阪愛に関していうと、大阪は、
昨年「世界で最も住みやすい都市ラン
キング」(英誌『エコノミスト』)で
ウィーン、メルボルンに次ぐ世界第
3位になりました。その際、各都市の
共通項が何かないかと考えたので
すが、おそらく新と旧が「まじりあ
っている」ということではないか

織太夫 鴻池といえば当主は素人浄瑠
璃をやっており、うちの初代鶴澤道
八は、11代鴻池善右衛門のお抱え
の三味線弾きだったそうです。昔は
そういう交流がたくさんあって。
池永 新旧だけでなく、人と人の混
じり合いも重要です。都市もそう
ですけど、モノづくり、ビジネスも
そうだと思うんですね。新旧の混じ
り合いのなかで、それらをつなぐの
は何だろうと思ったときに、それは
まさに「文化」であると思っていま
す。そういう意味でも、大阪の文化
の中核ともいえる文楽の役割は大
きいのではないのでしょうか。

大阪に文楽が残っているのは必然性があるから?

池永 私は大学で「大阪の風土と文
化」の講座をもっていますが、人形
浄瑠璃のことを話したところ、学生
の感想文に「私は織太夫さんに文楽
を教えてもらいました」と書かれて
いたのでビックリしました。織太夫
さんは、長年地元小学校で文楽を
教えていらっしやいますよね?

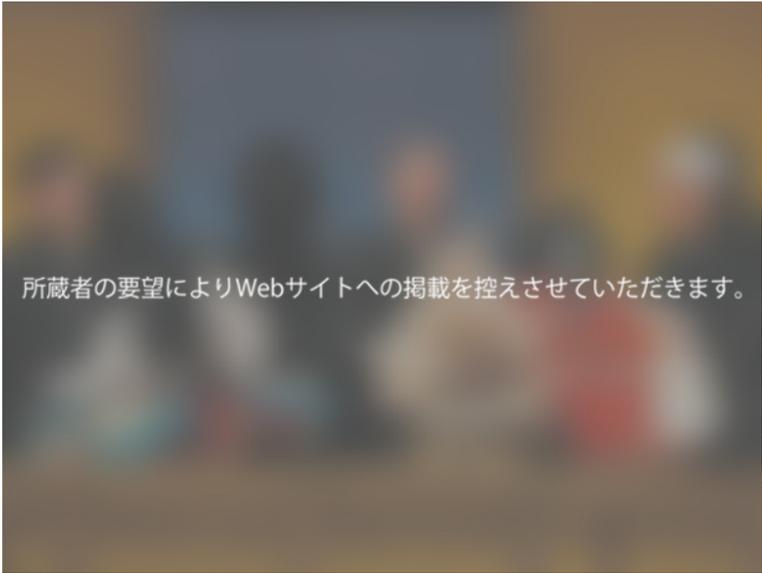
織太夫 授業での「子ども文楽」は、
今年で18年目になります。1学年が
1クラス30人ほどの少人数で、ほと
んどが黒門市場や商店の娘息子たち
でも累計で考えると、500人以上の
若者が浄瑠璃を語って、三味線も
弾けて、能管も吹けて、太鼓も叩

と。まじりあうにはふたつの漢字があ
って、「交」という字は使った食
材が分かるようなまぜかた、「混」
という字は元の食材を見えなくす
るように入ざる、つまりAにBを入
れたらCが生まれるというまぜか
たです。そして私は、大阪の本質は
「混ぜる」の方じゃないかと思っ
ています。「混」は「シ(水)+昆(丸
まどまる)」で、水が流れて丸くま
まっっていく様を表しますが、その
ように多様なもの、新旧という時
間軸を混じりあわせて新たなもの
を生み出してきたのが大阪という
都市です。文楽も伝統に安住す
ることなく、常に新しい価値を生
み出そうとしておられるので
すね。

ちなみに江戸時代の大坂観光の訪
問先ベスト3は、四天王寺、大坂城、
阿弥陀池なんですよ。
織太夫 明和年間に竹本座の劇団が
分裂したとき、初代竹本綱太夫が
「竹本義太夫座再興座本」を名乗

けて、人形も遣えるようになった。
奇跡的なことです。ちなみに文楽の
太夫だけで稼いでいる人間は19人、
ある意味絶滅危惧種です。今は「文
楽のすゝめ計画」というのをやっ
ています。大阪に来てもらうため
の展示会をしたり、義太夫節の体
験教室を中之島図書館でやったり。
こうした活動は、結構、昔から
やられていました。明治期の廃
仏毀釈の時代に、それこそ「ルネ
ッセ」ですけど、仏教を再興させ
ようと頼った先が人形浄瑠璃だ
ったわけです。たとえば『壺坂観
音霊験記』は、盲目の旦那が「死
ぬ」と言っただけで崖から飛び
降り、奥さんも飛び降りて、普
通だったら死ぬところ、観音様
のおかげで目が見えるようになって
ふたりとも生きのびる。文楽で
は普通あり得ないハッピーエンド
です。これは仏教にもう一度光を
当てるために人形浄瑠璃が使わ
れたという証拠です。

池永 私は、元禄のときにつくら
れた太夫、三味線、人形遣いの「
三業一体」こそが、商業都市大
坂ならではのイノベーションだ
んじやないかと思えます。
織太夫 竹本義太夫の登場によ
って、それ以前の浄瑠璃が「古
浄瑠璃時代」と呼ばれるようにな
り、新しい時代の幕開けを迎え
たんです。浄瑠璃にもいろいろあ
りますが、ベ



平成30(2018)年12月文楽公演『鎌倉三代記』より
写真提供/国立劇場 協力/国立劇場、人形浄瑠璃文楽座

- 今後の文楽公演
- 2019年4月6～29日(18日除く) 国立文楽劇場開場35周年記念4月文楽公演
第一部『通し狂言仮名手本忠臣蔵(大序より四段目まで)』、第二部『祇園祭礼信仰記』近頃
河原の達引』大阪・国立文楽劇場
 - 2019年5月11～27日 5月文楽公演
『通し狂言 妹背山婦女庭訓』東京・国立劇場

シツクはあくまで上方です。発祥地としては京都だと思えますが、大坂に移ったんですね。これはやっぱり経済が大坂に来たから。今、東京にいろいろなものが集まるのも経済が東京に移ったからでしょう？ でもどんな状況にしろ、人形浄瑠璃という芸能が大坂を離れなかったのは、大阪でなくてはいけなかったからなんです。

池永 人形浄瑠璃の多くの作品の舞台が大坂や京都だっただけでなく、本質が「商い」であったからではないでしょうか。人形浄瑠璃にとって大坂にいることの必然性があつたわけですね。

織太夫 演目やことば、訛りだけでなく、楽器もそうです。三味線は日本の楽器だと思われがちですが、ルーツは琉球の三線^{さんせん}で、その元は中世ベルシャの楽器だそうです。材料を見て、胴は花梨、棹は紅木^{べにき}でインドやミャンマー産、撥は象牙、駒は水牛の角、糸はシルクです。まさにシルクロードの終着地点である大坂が生んだ芸能といえます。

天下泰平、五穀豊穰を祈る御祝儀曲の『寿式三番叟』にしても、「とうとうたりたりら、たりあがりたりら、ちりやたりたりら、たりあがりたりら」と、たたりあがりたりらとう……何を言っているか分からない(笑)。これはサンスクリット語で、



太夫の語りにおいて、床本、見台(写真下)、尻引、オトシ、腹帯(写真上)などの道具類は欠かせない。特に腹帯は芯のある声を出すための必需品で、長年使い続けているため、現在の名の下にうっすら「豊竹咲甫太夫」の文字も見える。

「穀物は輝き、輝きて」だそうです。穀物とは米や小麦で、収穫の喜びを「悦びありや、悦びありや」と舞っているのです。

池永 古代より、遣隋使・遣唐使のみならず、シルクロードを通り、世界最先端の大陸の文化を日本に取り入れ、日本的に翻訳・編集してきましたが、その方法論は江戸時代にも発揮されたということですね。しかし、どうしてサンスクリット語のまま演じられるようになったのでしょうか？

織太夫 それは声明^{しょうめい}からきているので、やはり仏教の影響ですね。

また、人形の髪の毛はチベットのヤクという動物の毛でつくられているのですが、チベットからわざわざ輸入していたわけではありません。当時、唐^{たう}ものや高麗^{こうらい}ものといった磁器や陶器が珍重されており、船でそれ

らを運ぶ際にヤクの毛で包んでいたんです。それを大坂は、上手に再利用したというわけ。「面白いでしょう？

池永 シルクロードの終着地点である大坂で、世界の「技術」が日本的なものとの融合した形が、現代の文楽で観たり聴いたりできるのはとても興味深いですね。

大坂人の編集力

織太夫 私は六代目竹本織太夫を襲名した際に『摂州合邦辻』下の巻の切「合邦内」を演じましたが、実はもともとはインドの王子様の物語なのです。物語の中で「俊徳丸」という人物が登場しますが、本来は「信徳」と書きます。これは中国におけるインドの尊称です。そして「丸」とつくると、たとえば牛若丸や梵天丸

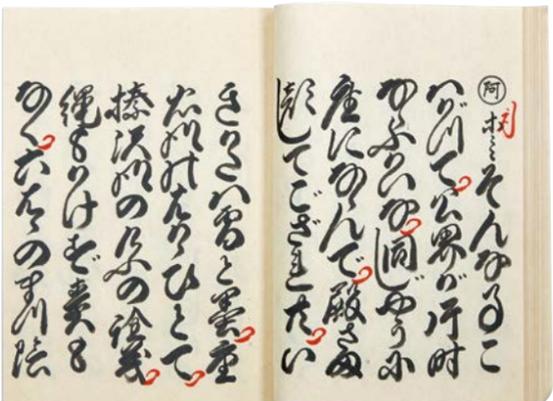
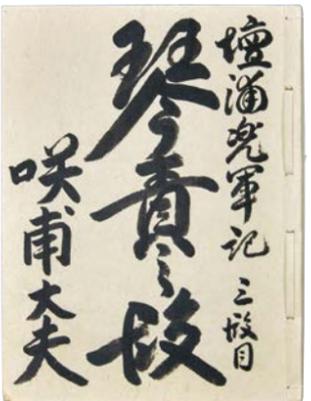
などは武家の子が幼名として後継ぐべき嫡男にも使用される。いわば王子ですよ。ということは、インドの王子様の親殺しであるとか、継母の恋であるとか、放浪であるとか、それらを編集し、大坂版の物語に変えてしまったということなんです。**池永** 日本という「内」と世界という「外」とを融合する編集力はすさまじいですね。江戸時代は鎖国してはいたといわれますが、決してそうではなく、むしろグローバルな時代だったと言えるのですね。

織太夫 ある意味、今日のハリウッドのようなものだったんでしょう。海外から大坂に入ってきたものを大坂人用に全部つくり直した。

池永 全て編集されたものですか？

織太夫 そうです。大坂人の編集力には驚きです。だから、こうしたこ





と書かれた。太夫が語るとのこと。浄瑠璃文字で呼ばれる語りが手書きされる。太夫によって表現の個性を楽しむのも、その魅力のひとつだ。

とをちゃんと語り聞かせる人が出てこないといけない。これからの時代は語りの時代だと思います。テレビが面白くなくなると、4Kすらまだみんな持っていないにもかかわら

際、分限など使われ、自分がなすべき役割を意味しています。それが織太夫さんの「分」ですね。

織太夫 そうです。100年前の華やかなりし大阪時代の、文楽黄金時代再興に向け、種を植え、毎日水をあげ、肥料をやり、私が亡くなる頃には、うちの子どもたちやまだ見ぬ孫たちや、後輩たちが「あの人がいたから今の文楽がある」と、そう言ってもらえるように。

池永 先ほどからお話を聞いていて、

文楽再興で大阪を再起動

つくづく思ったことは、文楽はAとBを引っ付けてCを生み出す力を有しているということです。だからビジネスマンとして観ても、江戸時代の物語が腹落ちします。商いの原理原則や人間関係や義理、おもてなしといった大阪スタイルの本質を、文楽を通して学び、大阪人としての五感を磨く教材としても観ることができます。だからビジネスマン必見必聴だと思っています。

織太夫 岡倉天心が「芸術こそが政治や経済を動かすことができる。また、芸術と職人の技芸を分けてはならない」という言葉を残しています。ちなみに文楽の太夫・三味線・人形は技芸員と呼ばれますから、まさに技芸の人であり、芸術家でもあると

ず、さらに8Kとか言われても興味もてませんよ。逆に今、地下鉄なんかに乗っているとラジコ（スマホでラジオが聴けるアプリ）の広告だらけで、実際にあちらこちらでラジコを聴いている人がいるわけですよ。これからはラジオの時代。語り聞かせるという時代になってきているんです。「プロ野球でスターが出るんではない、ラジオの中継がなくなってきたのは、ラジオの中継がなくなったからだ」と誰かが言ってます。想像力を働かせるっていうことがなくなりました。タクシーに乗ってラジコで相撲中継をやっている、うまい人がしゃべったら生で見ているよりよっぽど頭に入ってくる。ちなみに文楽も、今は「観る」ですが、昔は「聴く」と言われていたんです。

池永 おっしゃる通り想像力は大事ですよ。災害のときもラジオが一番頼れる存在です。

織太夫 災害のときに4K、8Kはいらない。情報をきっちり正確に語れる人が必要です。スマホの普及で多くのモノがなくなりましたが、ラジオは復活しています。

池永 今、スマホなどの情報革命によって、生活、人間関係、教育、仕事の進め方などが大きく変わりました。とりわけ、インプットとアウトプットしか見えず、プロセスがプ

そして、大阪における芸術というのは人形浄瑠璃なんです。文楽こそが大阪の経済と文化。大阪のまちづくりの将来にもつながるんです。

私の長年の知り合いの話ですが、ハーバード・ビジネス・スクール在学中、先生に「君は日本人なのに文楽を観たことがないのか？ 文楽というのは世界で一番の芸能だ。こんな素晴らしいものはない」と言われたそうです。その文楽が右肩下がりを始めたのは、保存や承継だけを目的とし、思い切った革新的なものをつくらなくなったからじゃないですか？ だから、いろいろな実験があっという間です。

池永 文化の語源は耕す・栽培する・磨く(cultivate)ことであり、繰り返すことに本質があるのではないのでしょうか。繰り返しながらも、新たなことを加えて、進化・洗練し続けることが重要だと思います。

最後に、織太夫さんのこれからの目標を教えてください。文楽再興に向けて、どのような活動を展開していきますか？

織太夫 まずは太夫の数を倍増させたいですね。特に大阪、上方・関西の出身者を増やしたいです。何をやるにも太夫がいないと始まらない。そのためには、まずは広く多くの人に文楽という素晴らしい芸能にふれてもらい、一生の仕事にしてもらえ

ラックボックス化しつつある。以前対談させていただいた松岡正剛さんが、スマホによるメリットもあるが、スマホによって弱くなる時間軸と地理軸を取り戻すことが重要だと話されていました。

一番社会に影響を与えたのは、浄瑠璃作者「福内鬼外」としてなんですよ。彼の初作『神霊矢口渡』は、江戸で初演された浄瑠璃本のなかでも良く売れた作品でした。アンテナが4本、5本立っている、こうした人を東京に流出させてはいけない。

池永 先ほどの編集のお話だと思います。大阪の人は古代から現代までの一貫通の歴史、同じ場所に幾重も積層された物語を混じりあわせながら、現代的視点で組み換え、編集できていたのでしょう。だから『撰州合邦辻』といった題目も理解できる。演じる人、観客の双方に編集能力があった。しかし、今それがかなり薄れていて、瞬間瞬間のものしか分からなくなり、全体が繋がってこない。

織太夫 だから編集能力に長けた人が重要視される時代なんです。今、感度の高い人、携帯だったらアンテナが4本、5本立っているような人たちは、すぐ東京へ行ってしまう、大阪にあんまりいないのです。それはやっぱり経済が大事だからなのでしょう。

平賀源内のご存知です。エレクトルで有名ですが、彼は広告業界だったら日本初のコピーライターとも言われています。「土用の丑の日」とかつくっている。だけど

るように、私自身が素晴らしい舞台を務めないといけません。

池永 次世代にどう承継していきますか？

織太夫 ある方に子ども向けの新作を書いていただき、今曲をつけています。文楽版の『トイ・ストーリー』ですね。それをまだ文楽を観劇したことのない子どもたちに見せようと企んでいるわけなんです。たとえば、「文楽公演の終演後の舞台裏で人形たちが自分たちの意志を持って動き出す話です」と言われても分かりにくいけど、「文楽版の『トイ・ストーリー』」とでも申しましょうか。文楽ファンお馴染みの人形や詞章も出てきて、大人も楽しんでいただけると思います。つて言ったら、観に行こうかなと思うのではないのでしょうか？

それから、文楽はいわゆるピラミッドの頂点で、昔は女流義太夫から、どんな衆や素人の愛好家、それから小・中学生の子どもたちまで、それぞれが稽古に励んでいたんですよ。リトルリーグやシニアリーグ、草野球やノンプロといった野球のよう。そうしたピラミッドを再構築することに、大阪のまちは変わるんです。もともと文楽のまちは、浄瑠璃のまちなんですから。

池永 文楽は、大阪というまち、大阪人を表す原風景であり、大阪スタイルの本質を体現しています。文化

多様な人が数多く来ることはチャンスだと捉えています。今年のG20大阪サミット、ラグビーワールドカップ、その先の万博もそうですね。大阪に住んでいる人だけではなく、大阪に来る世界中の人たちが、文楽をさらに成熟させてくれると思います。新しい力や才能が、新しい文楽をつくると信じていますし、私もそのための努力を続けていかないとはいけません。

池永 まさに「分」ですね。「分」とは、自分、分別、本分、存分、分を承継するのはひとりの天才的なクリエイターだけではだめで、それを理解し、支持する人々が必要です。そういう意味で文化は都市・地域戦略です。

織太夫 私の大師匠(豊竹山城少掾)も「石にかじりついてでも大阪を出てはいけない」と、おっしゃいました。文楽協会は東京に、という話もありましたが、今日お話ししたような文楽の歴史を考えまして、やはり大師匠のおっしゃる通りに、大阪の土地を離れてはいけないと私は思いました。その気持ちを大阪の人たちにひとりでも共有していただければ、文楽を長く愛していただけると確信しています。



竹本織太夫
たけもと・おりたゆ
1975年、大阪府・心齋橋生まれ。2018年に豊竹咲南太夫改め六代目竹本織太夫を襲名。祖父は文楽三味線の二代目鶴澤道八、伯父は鶴澤清治、実弟は鶴澤清治。NHK Eテレの『にほんごであそぼ』にレギュラー出演するなど、文楽の魅力幅広く発信する。11年、第28回咲くやこの花賞、13年、第34回松尾芸能賞新人賞、平成25年度大阪文化祭賞グランプリ受賞。



池永寛明
いけなが・ひろあき
大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長。1959年、大阪市長生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部に人事勤務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。